

清川雅光著 「『甘え』理論の再認識と新たな見解」 へのコメント

田澤安弘
北星学園大学

国籍: 日本

現住所: 北海道江別市

要約:

清川氏の論文は、精神分析医・土居健郎の「甘え」について独自の視点から読み解いたものである。論文の体裁は荒削りなところがあるものの、内容にはオリジナリティが感じられる。したがって、評価は+1とする。一点だけ疑問に思うのは、土居が晩年に至った境地は精神分析“技法”への信仰なのか、それとも真実性を志向する治療的“態度”への信仰なのか、ということである。

キーワード:

真実性、精神分析技法、治療的態度

Some Comments on Kiyokawa's Article 'New understandings and aspects of "Amae" theory'

Yasuhiro Tazawa
Hokusei Gakuen University

Summary

Kiyokawa's article brings a unique perspective to the theory of "Amae" generated by a distinguished psychoanalyst Takeo Doi. Although his article is a bit badly put together, it offers an original point of view. So it can get an evaluation "+1." It's basically a good paper, but I wonder what kind of faith Doi had in his last years. Was it a faith in psychoanalytic "technique," or therapeutic "attitude" looking for a way to the authenticity? It's difficult to tell which is which.

Keywords:

authenticity, psychoanalytic technique, therapeutic attitude

清川氏のこの論文は、精神分析医・土居健郎の「甘え理論」にかかわる、新たな理解と再認識を提示することを目的として書かれた論考である。私から見て、以下の三点が論じられている。①甘え理論の形成プロセスに認められる、土居自身の挫折体験に着目したこと。②甘えという現象の「上下関係」と「非言語性」を良寛の思想から読み解いたこと。③土居の分析医としての姿勢の変遷を、科学と宗教、あるいは精神分析とキリスト教という二分論から、それらの統合へと至るプロセスとして理解したこと。

最も注目される記述は、一見すると矛盾するかのように見える精神分析と宗教に関して、「真実性」をキーワードとして論じた後半部分であろう。分量も多く、このテーマを論じるためにほとんどのページが割かれている。

私は精神分析や土居の甘え理論には暗いのだが、清川論文の記述をもとにして一点だけ言及したい。それは、はたして清川氏の言うように、土居の信仰と精神分析は統合されるに至ったのか？ という疑問である。

私の誤解をかなり含んでいると思うが、清川氏の論旨はこうであると思う。

まず、甘え理論の治療機序は、甘えの危機を体験して対象に密着していた自己の表象を対象から引き離し、自分の意識を回復することである。土居流の精神分析療法では、この「危機」を経過することが必要なようである。では、そのような精神分析によって病める精神が治ったと言える場合に、そこで起こっている事実は何か？ それは「信仰」をもっていることである。では、信仰とは何か？ それは個人にとっての心のあり方へのよりどころである。土居は、「真実性」への信仰と祈りをもって患者の真実に立ち向かう。真実性とは、治療者としてのたんなる職業倫理を超えた、治療者個人の人格的なあり方であり、真実を照らし出すためのよりどころや態度のことである。

このように理解すると、土居が晩年に至った境地は、はたして甘えに焦点が合わされた精神分析技法への信仰なのであろうか？ もしもそうであるのなら、信仰と「甘え理論」という精神科治療理論の統合は果たされたと言えるのかもしれない。しかし、清川論文にちりばめられた引用を読むかぎり、私にはそのように理解されなかった。

こうである。晩年の土居はもはや精神分析技法を超えたところ、つまり治療者の人格的なあり方としての態度に向かった。すなわち「真実性」である。これはフロイドからの引用だが、多少意味は違っても人間性心理学が十八番としている概念でもある。ここで私には、カール・ロジャースと土居健郎の姿が二重化して見えてくる。

よく知られていることだが、ロジャースは、自分の非指示的アプローチがたんなる小手先の技法と見なされることに疑問を感じ、みずからのアプローチを来談者中心と名づけた。そして、その後、パーソナリティが変化するための必要にして十分な条件として、治療者側の態度条件を定式化した。あらゆる流派の技法に通底するはずの治療的態度である。土居の言う真実性、つまり治療者の人格的なあり方としての態度とは、このような(精神分析)技法を超えた態度のことではあるまいか？

以上が、清川論文に触発された私の感想である。誤った理解をしているのではないかと、

かなり危惧しているのではあるが。

文中に清川氏の「信念」が書かれている。「筆者にとっては、フロイドを初め多くの既成の治療理論や方法が迷わず治療者としての筆者のよりどころであった……フロイドや他の治療理論が、信仰や祈りの対象に相当しているのである」である。清川氏がよかれと思って「信仰」しているのは、治療理論とそこから導かれる技法なのであろうか、それとも技法を超えると同時に、技法を介して具現される治療的態度のことなのであろうか？

信仰と呼ぶには少し抵抗があるのだが、私がよりどころとしているのは、自分と相談者がただひたすらにもにあること、共存在、プレゼンスといった考え方である。技法でも、治療的態度でもない。ここが、おそらく清川氏と相違する点であろう。しかし、効力のある心理療法とするには、よりどころは違っても、自分がそれを信じる意志こそが大切なのだと思う。心理療法の効果が、それに対するクライアントの期待によって左右されるように(プラセボ効果のごとく)、臨床家の信念によっても左右されると思うのである。信じればこそ、そこに力が生まれるような気がしている。

さて、論文としての評価である。実験やリサーチの結果をまとめたものではなく、形式としてはかなり自由な論文である。しかし、荒削りではあるが論旨がはっきりとしていて、土居精神分析と信仰の関連についてよくまとめられ、独自の視点を加味しているので、このまま受理してもよいと思う。私自身かなり思考を触発されて、ためになるところが少なくなかった。

以上。